

U6章 形容詞の否定構造 63

U6.1 形容詞の否定構造 (64)

(1) 「高い」の否定構造 (64)

(2) 丁寧の否定構造 (65)

U6.2 形容詞の2種類の「ない」と否定詞の「ない」 (66)

(1) 形容詞の「ない na.k-」①…非存在を表す na.k- (66)

(2) 形容詞の「ない na.k-」②…形容詞を否定 (xxx.k-u=) na.k- (66)

(3) 否定詞の「ない -(a)na.k-」……動詞を否定 -(a)na.k- (67)

U6.3 動詞「ある」の否定は形容詞の「ない」に……なぜ? (68)

U6.4 二重否定の構造 (70)

(1) 高くなくはない 不完全な肯定 (70)

(2) 「なくはない」はなぜ「ある」に? (70)

(3) 「ない」を二重否定してみる (71)

(4) ないことはない……同語反復形式としての二重否定 (72)

(5) ないものはない……2用法 (74)

U7章 形容詞の時間表現 75

U7.1 形容詞の時間関係表現は2種類…事象と質 (76)

U7.2 形容詞が事象を表す場合 (78)

表U7-6 事象を表す修飾形容詞の絶対・相対時表 (80)

U7.3 形容詞が質を表す場合 (82)

U7.4 名詞を修飾する場合の形容詞のイとタ (84)

名詞を修飾する場合のイとタ (84)

形容詞に相対時表現はあるか (85)

質問の解答例 89

U1章 (90)

U2章 (92)

U3章 (97)

U4章 (101)

U5章 (104)

U6章 (105)

U7章 (107)

あとがき (109)

コラム

コラムU1 感情形容詞と属性形容詞 (8)

コラムU2 3種類の円筒 (25)

コラムU3 生涯教育 (26)

コラムU4 すごい切ない (40)

コラムU5 学習者の誤用 ①激しかった雨 ②多い雨 (86)

コラムU6 集合は私の家がありがたい。 (88)

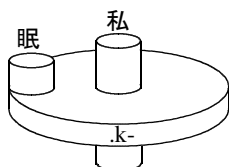
感情形容詞と属性形容詞

形容詞を「感情形容詞」と「属性形容詞」に分けることがあります。

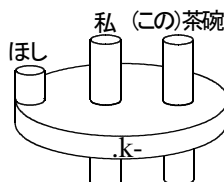
[感情形容詞]

- (1) あーあ、眠い。
 (2) この茶碗がほしい。

と言うときには、まさに話者その人が「眠い」「ほしい」と感じているということが聞き手に伝わります。主語は発話者であることが明白なので、ふつう省略します。このような形容詞を「感情形容詞」とよんでいます。(主語を一人称以外にするとときは、「彼は眠そうだ。」「彼女はこの茶碗がほしいらしい。」などのようにします。)



図U01-1 (私は)眠い



図U01-2 (私は)この茶碗がほしい

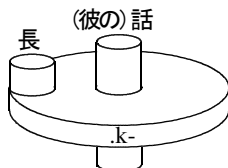
「感情形容詞」が複主語で使用される場合については本書p.47をご参照ください。ちなみにいえば、「好きだ・嫌いだ」はナ形容詞で、イ形容詞ではありませんが、発話者以外にも主語になりますので、属性形容詞の性質も持った感情形容詞です。

- (3) 私はうどんが好きだ／嫌いだ。
 (4) 彼はうどんが好きだ／嫌いだ。

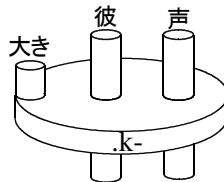
[属性形容詞]

- (5) 長いなあ。「何が？」と問いたくなります。
 (6) 彼は声が大きい。

と言うときには、何かの属性について話者がそう判断していることが伝わります。主語は発話者とは限りません。このような形容詞を「属性形容詞」とよびます。



図U01-3 (彼の話は)長い



図U01-4 彼は声が大きい

◎「おもしろい」のように両方の形容詞として使用される形容詞も多いです。

[属性形容詞] この本、おもしろい? [感情形容詞] うん、ぼくはおもしろい。

コラムU2

6.3～6.7, A17.1⑥

3種類の円筒

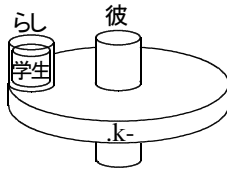
円筒は実詞(実体)として機能しますが、これを3種類に分けます。

小円筒 実体の中に入れて使用します。

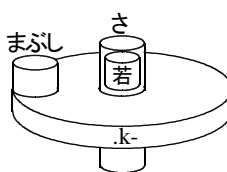
(カプセル) 実体の中に入れて形容実体にする小円筒は「し/た/っば/っぼ/な/らし/たらし」(本書pp.12-14に例示)などです。(下左図)

小円筒「さ/み/げ/そう」は形容実体を実体にします。(下中央図)
(本書p.36参照)

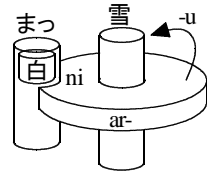
小円筒「まっ」も形容実体を実体にします。(下右図)



図U2-1 学生らし.k-



図U2-2 若さが

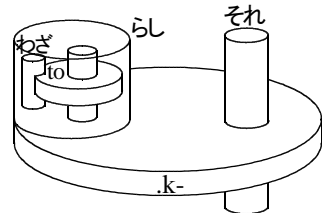


図U2-3 真っ白な

中円筒 構造の一部を生かす形で

(カプセル) 中に入れて使用します。

形容実体である中円筒は「らし」などです。

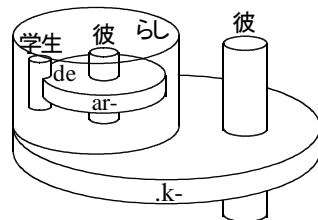


図U2-4 それ01はわざとらしい

大円筒 構造の中に入れて使用します。

(包含実体) これは『日本語のしくみ(1), (2)』や、本書のあちこちに示してある「包含実体」のことです。

形容実体としては「らし」(右図)や、本書pp.22-23の0の包含実体の例などがあります。



図U2-5 彼01は学生(である)らしい

- 問U2-19 形容実詞「っば」の小円筒, 中円筒, 大円筒での例を考えてください。
 問U2-20 「まっ白い」「まっ白な」の「ま(っ)」は同じものと考えてよいでしょうか。
 問U2-21 小円筒「彼は学生らしい」, 大円筒「彼は学生らしい」の否定の違いは?

コラムU3

生涯教育

「日本語構造伝達文法」を生涯教育のつもりで受けたい、と言って受講に来てくださった年配の方がいました。現在の私は69歳ですが、このくらいの方でした。若いときは国語文法にも関心があったとのことでした。

講義が始まって、動詞の形態素分析は「飲まされる nom-as-ar-e-ru」のように、ひらがなではできない、と言ったところ、質問をしてくれました。

質問：では、橋本進吉や時枝誠記などの国語学者は間違っていたのですか。

私の回答：この文法の立場では、そう言わざるを得ません。

その方は怒ってしまいました。この世に国語学者の権威を否定する論があろうなどとは夢想だにしなかったに違いありません。聞く価値がないということなのでしょう、2回目からの講義にはおいでになりませんでした。

その方にとっての生涯教育とは、時間の経過とともにあやふやになってしまった若いころの知識を、再確認・再構築することだったのだと思います。たしかに、ふつうの国語学の文法なら、基本的認識は百年以上変わっていませんから、その期待には十分応えることができるはずです。

私は退職し自由人になってから、歌謡教室で昭和歌謡を改めて練習し始めました。若いころに親しんだ歌を正確に歌えるようになる喜びを実感しています。まさに生涯教育です。その方は国語文法で同じ喜びを味わおうとしたのでしょうか。

「日本語構造伝達文法」はそのような方の生涯教育には向かないのだとつくづく思いました。では、どんな方の生涯教育にも向かないのか、と自問してみました。いいや、そんなことはないはずだ、というのが答えでした。次のような方なら喜んで受け入れてくれるにちがいないと考えるようになりました。

- ・日本語の文法を論理的に説明することを望む方
- ・日本語教育に携わり、学習者から受けた文法上の質問の回答に苦心した方
- ・国語文法では文法現象の論理的な説明ができないことに失望している方
- ・外国の言語理論では日本語の文法を捉えきれないことに失望している方
- ・国語学(文法)の権威の根拠を確認しようと考えている方
- ・日本語を一貫した理論で体系的に捉えたいと望んでいる方

このような方ならきっと理解してくれるだろうと思います。しかし、このような方はそう多くはないだろうとも思います。

* * * * *

私はそのような方を友として「日本語構造伝達文法」を書いています。残された時間は少ないですが、未来の日本人に宛てて、与えられた勤めを果たします。

コラムU4

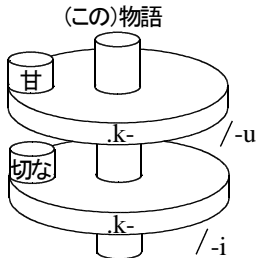
すごい切ない

次の文では形容詞「甘く」「切ない」が2つとも名詞「物語」の属性になっています。

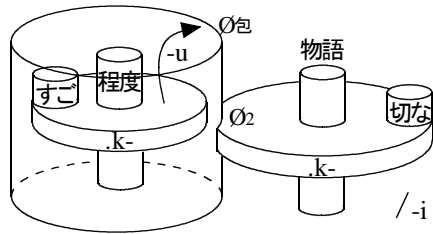
(1) この物語は 甘く 切ない。 (下左図)

しかし、次の文では「すごく」は名詞「物語」の属性ではなく、「程度」の属性になっていて、「〈切ない〉の程度が大きい」ことを表しています。

(2) この物語は (程度が)すごく 切ない。 (下右図)



図U4-1 甘く切ない



図U4-2 すごく切ない

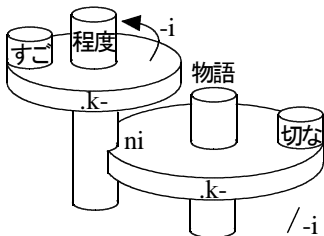
「甘く ama.k-u」と「すごく sugo.k-u」の-u は同じ-u でも機能がずいぶん異なります。「甘く」の-u は次の形容詞を続けるための「他属性連続描写詞」(本書p.30)です。「すごく」の-u はゼロの包含実体を修飾して、「すごい」を名詞化するための「実体修飾第2描写詞」(本書p.33)です。(例: too.k-u 遠くから来る。tika.k-u 近くに住む。)

「すごい切ない」の2とおりの説明可能性

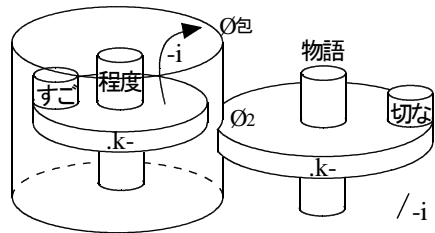
[1] 「実体修飾第1描写詞 -i」で「程度」(のような)実体を修飾した上で、自明である「程度」を省略すれば「すごい程度に切ない」になります。(下左図)

[2] また、この -i を「すごく sugo.k-u」の -u の代わりに使用すると、文法慣用にははずれますが、その分独特の印象の表現になります。(下右図)

[2]は文法慣用にはずれる要素があるので、[1]のほうがより自然な説明です。



図U4-3 すごい(程度に)切ない



図U4-4 すごい切ない (上右図と比較)

※この「すごい」に似た形容詞に「えらい」「ものすごい」があります。

コラムU5

A15.6

学習者の誤用① - *激しかった雨が降った-

[時の分化]

表U7-6 を見てください。38のますの中に事象 [1] と [2] の時間関係が示されています。事象 [1] は形容詞の示す事象です。[2] は形容詞とは限りません。この事象 [1] と事象 [2] が時間的にまったく重なっていることを「時の分化がない」といいます。時間的に重なっている部分のあることを「時の分化が一部ある」といい、重なっていないことを「時の分化がある」といいます。

[時の分化のないとき]

時の分化のないのはAとDとHの組の [1] と [2] の「同時」の場合です。Dの組は「現在」、Hの組は「未来」ですから、絶対時表現でも相対時表現でも「激しい雨が降った」のように「イの形」になります。形容詞は「イの形」で「質」も表しますので、「イの形」では自然に聞こえ、問題を起こしません。

Aの組は「過去」を表すので、絶対時表現では「激しかった雨が降った」のように「タの形」になります。問題なのは、「激しかった雨が降った」はふつうおかしい表現と捉えられることです。日本語の形容詞では、「同時」の場合は「激しい雨が降った」のように「質」が「相対時表現」で表すことが優先されます。

それで、「同時」のとき「タの形」を使用すると、「必要もないのにタの形を使っている」と感じられます。これを避けるために、それが絶対時・過去の表現が必要な特別の事象であることを示す情報が必要です。本書p.84も参照してください。

日本語母語話者はこのことを直感的に了解していますが、日本語学習者の場合はそうではありません。特に英語話者のように従属節でも絶対時表現を用いる母語を持つ学習者は、当然のこととして「激しかった雨が降った」と言います。

[時の分化のあるとき]

時の分化のあるときはほとんど問題がありません。時が分化しているということは、形容詞が「質」ではなく「事象」を表しているということが明白なので、絶対時表現も相対時表現も許容できるからです。

[学習者の誤用]

それで、つまり、学習者の誤用が起こり得るのは、「過去」を表すAの組の [1] と [2] が同時に生起するときに、[1] の事象を絶対時の「タ」で表現する場合(AZの場合)であるということが出来ます。

問U7-14「激しかった雨がやんだ」という表現は自然ですか。説明してください。

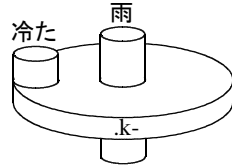
学習者の誤用② - * 多い雨が降った -

〔「冷たい」の必要要素〕

形容詞「冷たい」の必要要素は「触感温度」で、意味は「触感温度小」です。

雨が冷たい。 (「冷たい」はp.15参照)

「雨」は「触感温度」を持ちますから適合主語です。また、名詞を修飾して「冷たい雨」とも言えます。

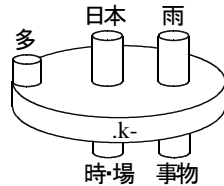


図U5-1 雨が冷たい

〔「多い」の必要要素〕

一方、形容詞「多い」の必要要素は「(a)ある時か場における(b)事物の数量」で、単なる「数量」ではありません。意味は「その数量大」です。

「冷たい」と違い、「多い」の必要要素には「数量」だけではなく、未確定の要素が(a)(b)2つあります。いま、(a)を「日本」、(b)を「雨」とすれば、この文ができます。



図U5-2 日本のは雨が多い

この例では、「日本」における「雨」の「数量」が大であることが示されています。

(a)(b)のどちらかを欠く場合は、質問したくなります。

(a)時・場を欠く場合 「雨が多い」 「どこに/いつ」と質問したくなります。

(b)事物を欠く場合 「日本は多い」 「何が」と質問したくなります。

名詞の修飾では、時・場を修飾するのが自然で、事物の修飾はまれです。

(時・場)の「日本」を修飾 「雨が多い日本」

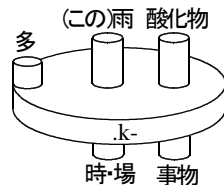
事物の「雨」を修飾 「日本が多い雨」

つまり、「多い雨が降った」の「多い雨」が不自然なのは、未確定の要素が2つある「多い」で、(時・場なしに)事物を修飾しているからであるといえます。

(「酸化物が多い雨」なら自然です。(a)時・場が「(この)雨」で、(b)事物が「酸化物」であり、事物を伴い、時・場を修飾しているからです。) (pp.60-61, 問U5-5も参照)

〔学習者の誤用〕

日本語母語話者は「多い」の必要要素が2つの未確定な要素を持つことを直感的に了解しているので、「多い雨」とは言いませんが、学習者は「冷たい雨」と同じように考えて「多い雨が降る」と言いやすいです。



図U5-3 酸化物が多い雨

コラムU6

集合は私の家がありがたい。

この文は「集合」と「私の家」の2つが「ありがたい」の主語になっている二重主語の文のようですが、5種類の複主体のいずれにも属さないように思われます。

- (1) 本属複主体 例:「象は鼻が長い。」
- (2) 因果複主体 例:「冬は水が冷たい。」
- (3) 感覚複主体 例:「私は昔が懐かしい。」
- (4) 時場複主体 例:「彼は午後が忙しい。」
- (5) 数量複主体 例:「車は3台が新しい。」

どのように考えればよいのでしょうか。

「ありがたい」と感じるのは「私(一人称)」です。ということなら、この文に「私」を補うことができます(本書p.47参照)。

(私は) 集合は私の家がありがたい。

「私は……ありがたい」ということになれば、上の(3)感覚複主体のようです。ということは「ありがたい」と感じさせるのが「集合は私の家」ということになります。

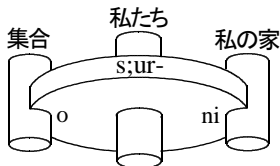
私は 集合は私の家が ありがたい。

つまり、感覚主体が「私」で、帯感主体が「集合は私の家」ということになります。

感覚主体……「私」

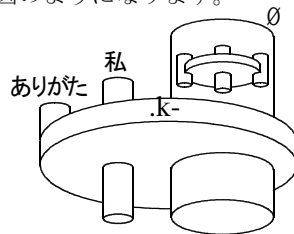
帯感主体……「集合は私の家」

ということは、「集合は私の家」というのは「うなぎ文」(S1.10)のような省略された表現なのでした。これの元の文はたとえば「私たちの₀₁は私の家に集合(を)する。」のように考えることができます。構造は下左図のようになります。



私たちの₀₁は私の家に集合(を)する

図U6-1 集合₀をは私の家



図U6-2 [集合は私の家]がありがた.k-

この構造が₀の包含実体で名詞になって感覚複主体の帯感主体となったわけです(上右図)。とすれば、初めにそのように思われた、「集合」と「私の家」が「ありがたい」の二重主語ではなかったのです。文中に表れていない「私」と、省略された表現の「集合は私の家」とが「ありがたい」の二重主語なのでした。